

告示	番号	59	慢性心疾患
	疾病名	大動脈縮窄症	

大動脈縮窄症

だいどうみやくしゅくさくしょう

概念・定義

大動脈峡部と下行大動脈の移行部、すなわち大動脈への動脈管接続部に生じる狭窄。左室の圧負荷をきたす。狭窄が高度だと、乳児期から心不全をきたす。成人期まで無症状のこともあるが、上半身は高血圧となり、脳出血、冠動脈硬化、心筋梗塞などで、寿命は通常より短い。治療と経過観察が必要な疾患である。

症状

狭窄が高度だと、乳児期から心不全をきたす。成人期まで無症状のこともあるが、上半身は高血圧となり、脳出血、冠動脈硬化、心筋梗塞などの合併症を起こす

治療

大動脈縮窄部を切除して端々吻合する手術を行う。有症状の場合には内科的対症療法を行い、診断後早期に手術を実施する。無症状の場合には、3歳前後、遅くても5歳までに手術を行う。3歳以前の手術では遠隔期の再狭窄が、3歳以降の手術では遠隔期の高血圧が起りやすく、いずれの場合にも術後内科的管理・治療を行い、必要に応じてカテーテル治療ないし再手術を実施する。カテーテル治療は術後再狭窄に対する治療として有効である。未手術例に対してカテーテル治療が行われることもあるが、約40%の症例で術後に動脈瘤を発生するとの報告があり、適応は確立していない

抜粋元：http://www.shouman.jp/details/4_55_69.html